

爾靈山

乃木希典

爾靈山は陰謀豈攀難

男子の功名克艱を期す

鉄血山も覆うて山形改まる

万人齊しく仰ぐ爾靈山

【作者】乃木 希典（一八四九〜一九一二年）明治時代の陸軍軍人。長州藩（山口県）江戸屋敷に生まれる。文を吉田松陰の叔父玉木文之

進、剣を栗栖（くりす）又助に学び、また詩歌にも秀れ石林子（せきりんし）、石樵（せきしよう）と号した。歩兵第十四連隊長心得として西南戦争に出征し、連隊旗を西郷軍に奪われる屈辱を嘗（な）めたが、日清戦争では第一旅団長として旅順を占領した。

【語釈】*爾靈山：旅順の二〇三高地のこと。乃木將軍によって 爾靈山の名を得た。日露戦争では、第三軍司令官に任命された。明治三十七年大将。明治天皇の大葬当日静子夫人と共に殉死した。年六十四歳。

【通釈】*克 艱：艱難に打ちかつ *鐵 血：兵器と人の血。二〇三高地が如何に峻（けわ）しくとも、攀じ登れぬ筈はない。男子たるもの功名を立てるためには如何なる困難にも 打ち克つ

という覚悟が肝要である。その決意のもとに激戦、遂に武器と人の血で山全体を覆うて山の形さえ変わってしまった。この激戦によつて遂に旅順も 陥落するに至つたのである。この大功と共に多くの人命を失つた。嗚呼（ああ） 爾の靈の山である、と万人が齊しく仰ぎ 英霊を慰めるであらう。

【備考】日露の戦役我が軍の攻撃七十余日、彼我（ひが）の死傷各（おのおの）万を超える。古来未曾有（みぞう）の惨烈を極める。現在のは山の高さ二〇〇メートル、往時の激戦にて三メートルひくくなつたといわれる。山の頂上には英魂を弔う希典（まれすけ）書の碑がある。